

復興に向かって ～看護の力～

第2回 岩手県立久慈病院（岩手県久慈市）

岩手県北東部に位置し、太平洋に面する久慈市。東部にある久慈湾の奥部に岩手県立久慈病院がある。同市を含む1市1町2村からなる人口6万861人の久慈医療圏唯一の中核的総合病院として、質の高い医療を地域に提供している。

声掛けて災害時の早産をゼロに

「東日本大震災の発災時、普段ならば見えることのない高波が病棟から見えました」と田頭浩子看護師長（助産師）は当時を振り返る。地震により、電気などのインフラがストップ。沿岸部の被災者対応や、次の津波に備えて患者さんを高層階へ移動させるなどの業務に追われた。

落ち着きを取り戻した後も、特に気が抜けなかったのは被災した妊婦へのケアだった。仮設住宅での避難生活を余儀なくされ、精神的に不安定になりやすく、正常な経過から逸脱してしまう可能性が高まる。田頭看護師長を含む13人の助産師で、積極的に声をかけた。また、いつでも相談に応じられる体制を取り、ストレスをため込ませないようにしたことで、早産などの発生をゼロに抑えることができた。

限られた資源の中で安全なお産につなぐ

県北部の周産期医療は慢性的な産婦人科医師不足により、県立二戸病院に集約している。分娩の取り扱いは、2008年からローリスクは院内

助産で、ハイリスクは二戸病院へ搬送対応を行ってきた。二戸病院までは救急車で約1時間かかり、また、同地域での分娩経過途中の搬送や切迫早産の件数が増加していることから、搬送のタイミングの見極めや、産婦人科医師との密な連携体制が欠かせない。搬送時は必ず助産師が同行し、道中の急変に対応できるようにしているため、08年から現在まで、搬送時のトラブルは一度も起きていない。

早産などのリスクを減らすため、妊婦健診では、妊娠期間に合わせた保健指導や相談など助産師が個別対応を30分間実施している。さらに、自治体の保健師と協働し、地域住民への安全なお産に関する啓発活動などにも精力的に取り組む。「限られた資源の中で安全なお産につなげるには、一人一人の妊婦さんへの働き掛けが大切です」と外館幸子総看護師長は話す。

震災をきっかけに地元へUターン

震災をきっかけに地元の医療機関にUターンした看護職は少なくない。助産師の今野真裕美さんもその一人。卒業後、宮城県内の病院に入職し、NICU（新生児特定集中治療室）に配属された。震災後、慌ただしい日々を過ごす中で、同僚の看護師が被災した地元へ転職するという話を耳にした。「自分の故郷であり、被災地に働く場を移すという働き方があることに気がきました」と話す今野さん。生まれ育った場所で働く気持ちが固まった瞬間だった。

その後、「岩手県立病院職員特別募集」に応募し、見事合格して採用第1号となった。「岩手県人として地域貢献のため、地元で頑張ろうという気持ちで日々の業務に当たっています」と現



保健指導を行う今野さん

在の心境を語る。

14年に久慈病院に入職後、ハイリスク分娩は全て搬送という慣れない環境の中で、業務を通じて、安全なお産には徹底した母体管理とリスクマネジメントが必要だということに気付いた。「毎日、新しい発見の連続で、助産師としての仕事の奥深さを学んでいます」

人口の減少に伴い、久慈病院の分娩件数は年々減少している。そこで、助産師職員の技術やモチベーション向上の一環として、昨年度から二戸病院への1カ月間の研修派遣を開始し、年間に取り扱う分娩件数を一定数確保するようにしている。「搬送先での業務を知ることで、違う視点で物事が見えるようになりました。今はもっといろいろな経験をしたいです」と今野さんはさらなる知識・技術の習得に意欲を見せる。

15年度内に、年間約330件の分娩を取り扱う近隣の診療所が分娩の取り扱いを中止することになり、分娩件数の急増が予想される久慈病院。「近隣の医療機関と連携しながら、安全で安心なお産を実践していきます」と外館総看護師長は意気込みを語る。